

『重編諸天伝』訳注記(一)

林 鳴 宇

解 題

一、撰者の行履について

『重編諸天伝』の撰者行履は、南宋時代に浙江の烏戍という地で活躍した僧である。行履の号は鏡庵であり、その師承は不明である。烏戍は、南宋時の湖州と秀州の境に位置し、烏墩鎮と喚ばれたこともあり、春秋時代から呉、越の境であったこの地区には、たくさん兵士を駐屯させたことから烏戍という地名がついた。現在は烏鎮と言う。隋唐以降は、大運河の疏通に伴い、南北につながる水陸要衝であった烏鎮は、文化や商業の中継地として発展を続け、多くの寺院が建立された。

『重編諸天伝』の奉規「序」と行履の自「叙」によれば、紹興年間(一一三一―一一六二)、行履は宝閣という寺院に住し、その後は、烏墩鎮の福田西華嚴蘭若に住した。「宝閣」は曾て、宋代華嚴を中興した晋水浄源(一〇二一―一〇八八)が五十年代後半から六十年代初に住した烏墩鎮の隣り町の青墩鎮

にある宝閣講院のことである。「福田西華嚴蘭若」とは、『光緒烏程県志』によれば、烏墩鎮の福田寺の側にある華嚴経堂のことであり、高僧鏡庵の修行した別道場であったと書かれている。行履は、華嚴教学を中心に研究したと思われるが、その著述を分析すると、決して華嚴だけを研究していたわけではないことが分かる。

行履の著述は、二つ現存する。一つは、一一七三年に天台僧の奉規によつて刊行された『重編諸天伝』二巻であり、もう一つは一一七九年に呉興の承信郎沈応辰によつて刊行された『円覚経類解』八巻である。

『重編諸天伝』の成立意義については、次節に譲り、ここからは『円覚経類解』に見られる行履の思想について述べる。

行履は、呉興県の武官であった承信郎沈応辰の要請を受けて、蜀僧復庵が著した十二巻『円覚経講義』を再編集し、『円覚経類解』八巻を出した。復庵は、『円覚経講義』のほか、『華嚴経論貫』も著した。その中で、真歇清了に随侍したこ

とがあること述べていることから、禅僧であった可能性が高い。行蓮は復庵の『講義』を簡略し、それに自分の意見を付け加えて、『類解』を作った。その意見とは、彼が天台教学を以て出した評論であったと筆者は考える。何故なら文中の「解釈」部分の尾端に、「然天台……(統蔵一五冊四二三右下)」「天台曰……(統蔵一五冊四二六左下)」「於台教……(統蔵一五冊四二七右下)」「若天台……(統蔵一五冊四三九右下、四五八左下)」「天台教云……(統蔵一五冊四六〇右上)」「只如天台教云……(統蔵一五冊四六一右上)」など、幾つか天台の立場を表す語句が表れるからである。そのほとんどは補充的な説明であり、復庵の『講義』に本来存在したものと考へ難く、行蓮にとつて天台教学が身近な存在であったことから、それを以て復庵の説明を補足したと考へられるのである。これらの補充はすべて、天台教学への批判ではなく、天台の立場による考へ方を紹介したものである。さらに、「禅教同帰」問題(統蔵一五冊四三三右上)について、中立的な説を説いており、その内容も行蓮自身によるものであると考へられる。当時、北方や内陸の禅僧が江浙地方へと移動する傾向があった。そして、江浙地方では土着の仏教が根強く信仰されていたため、外来の僧と度々衝突し、論争が生じた。例えば、南屏梵臻、呉興子昉(仁岳の弟子)と契嵩との論争、從義や処元の禅思想批判、草菴道因の秦桧宰相への三度の上書などを

挙げることができる。江浙地方で禅の勢力が拡大したため、天台を主とする教家は、自説の優位性を説くために、やむなく禅宗批判の立場を採った。行蓮はこのような事情を踏まえ、次のように説明した。

今時の学者は、お互いに非難し合つが、その根本にある問題を理解していない。坐禅する者は経論そのものを仏教外のものとして軽視し、講經する者は坐禅法を仏の教えでないと考えた。「因果修証」と言えば、これが教家のものと即断し、「修証」そのものが禅家の根本であることを知らない。「即心即仏」と言えば、これが禅家の教えであると決めつけ、「心仏」の理論こそが教家の本意であることを知らない。このように、自分の知る狭い知識で相手を非難し、禅家と教家の互いの攻撃はますます激しくなる一方である。例えば、父に二人の子供があり、両者は互いに父の両足のどちらかを大事にしている。右の子が右足から離れたら、左の子はすぐ右足に害を加える。逆も同じである。両者は、父の両足が等しく父のものであることを知らないのである。今時の仏弟子もこれと同じである。禅こそ仏の心であり、教こそ仏の語であることを理解していない。

(今時学者、彼此迷源。修心者以経論為別宗、講說者以禅門為別法。闢談因果修証、便推属経論之家、不知修証

正是禪門之本事。聞說即心即仏、便推屬胸臆之禪、不知心仏正是經論之本意。以參学爲戸牖、各自開張。以禪教爲干戈、互相攻擊。情隨鏃矢而遷變、法逐人我以高低、是非紛拏、莫能辯折。譬如一父而生兩子、其一子愛其父右足、若左足之子出、則其右足之子遂以利刃刺其父左足、若右足之子出、則其左足之子亦然。是二子不知左右之足、皆其父之一體。今之仏弟子亦然、不知禪是仏心、教是仏誨（『円覚経類解』卷第三本・統藏一五冊四三三右上下）さらに行蘊は、天台の遵式系統の辨才元浄の事例を取り上げて、辨才の「禪教一致」の作法こそ僧侶の根本であると主張した。行蘊は、江浙地方の僧の立場に充分配慮し、復庵の『講義』内容を添削し、自分の意をこころで表したのである。

また、『円覚経類解』は、宋の初めに流行した「三教一致」説を多く取り入れていた。『円覚経』の教理に対し、禪語を用いて説明し、また禪語を外典で解釈する傾向が見受けられる。要請者である沈氏のような在家信者に分かりやすくするためであったのか、それとも行蘊が「教禪一致」及び「三教一致」の見識を有していたためであるかについては、更なる検証が必要である。

二、『重編諸天伝』の成立意義

南宋の乾道九年（一一七三）、行蘊は、『重編諸天伝』二巻

を著した。行蘊は、その「叙」の中で、当著書が、四十数年前に刊行され世に伝えられた四明天台の南屏家の学僧澄覚神煥が著した『諸天伝』に基づくものであると認めたと、それを添削再治することにより神煥の意旨を一層明確にしたいと示している。

行蘊が参照にした神煥の『諸天伝』は、早くも散逸書とされている。南宋末の志磐が編纂した『仏祖統紀』でさえ、神煥の『諸天伝』の諸説を知っているものの、書物自体を目で確かめたことはない（巻一五、「神煥伝」）。

行蘊の「叙」を読んだだけであると、『重編諸天伝』は『諸天伝』の修訂版のように思われるが、実際には、諸天の出現順序も解釈も異なり、論調に対立的な点も見られる。

『重編諸天伝』は現在、中国本土では散逸書とされている。日本の卍字統藏経には収められているが、どの版本に依用したかについては明らかではない。筆者の調査によれば、日本に現存する『重編諸天伝』の刊本は、すべて寛文元年（一六六一）九月に書林中野是誰が刊行したもの（上下二巻、上巻三〇丁、下巻三三三丁）であり、卍字統藏経はこれを収録したと思われる。

『重編諸天伝』の本文は、三つの部分から構成される。第一部分は、編纂の縁起に相当する。行蘊が当時行った仏会、及び金光明懺法の中に発生する諸天配列に関する論争を取り

上げ、作法の違いにより配列も変わるとし、仏教行事における諸天配列の重要性を主張した。この部分の中で、行霊が提示した通常仏会及び金光明懺法における諸天の具体的な配列図は、諸天配列の原型となり、後世の中国仏教の各寺院に広く採用された。

第二部分は、諸天の本伝である。行霊は、神煥の『諸天伝』を参照しつつ、大梵天王、帝釈天王、北方天王、東方天王、南方天王、西方天王、金剛密迹、魔醯首羅天、散脂大将、大弁天、功德天、韋天將軍、堅牢地神、菩提樹神、鬼子母天、摩利支天、日宮天子、月宮天子、娑竭竜王、閻摩羅王の二十の天神の伝記を新たに編纂した。行霊の「叙」にも説かれてるように、神煥の編纂した旧伝は欠点が多く、それを再度添削整理し、煩瑣な引用や平凡な説を削除し、省略されていた内容や簡単にすぎる説明を補充した点が新伝の特徴であるとした。

第三部分は、質疑解答である。この部分では神煥の旧伝への批判から始まり、「辨慈威折攝」(＝神煥が説いた「主客説」に対する批判)、「辨衆天所主」(＝神煥が説いた「本迹説」に対する批判)、「辨天本迹」(＝神煥が説いた「本迹説」に対する批判)、「辨通称爲天」(＝神煥が説いた天神定義に対する批判)、「辨尊劣同列」(＝神煥が示した諸天の配列に対する批判)、「辨総聖録偽」(＝偽書『総聖録』に対する批判)

の六つの論目を立て説明した。

筆者は、以下のように、『重編諸天伝』の意義には三つあると考える。

一、南宋代に成立した短編文献の『重編諸天伝』は、早くも中国で散逸された。その内容について、これまで研究界ではほとんど取り上げられていない。しかし、『重編諸天伝』が確立した仏会に祀るべき二十天神の説が、『釈門正統』や『仏祖統紀』などの仏教史書に録されたため、その後の中国仏教の各寺院は行霊の説を広く採用した。

二、『重編諸天伝』が世に現れる前に、金光明懺法の道場における諸天の配置が、通常の仏会とは異なるため、これについて天台教団では頻繁に議論され、異見も多く存在した。しかし、『重編諸天伝』が上梓された後、その金光明道場と通常仏会の配置方式は共に仏教界に認められた。結局、行霊が定めた「金光明道場」の諸天配列図は、後世の「金光明懺法」の手本となり、明清を経て、現代の中国寺院もそれに従い「金光明道場」を設置している。

三、四明天台南屏家の神煥が著した『諸天伝』は、天台の「本迹釈」に拘り、故に諸天への解釈にも限界が見られる。一方、『重編諸天伝』の撰者である行霊は、天台教団に属していなかったが、『重編諸天伝』の中では天台智顛や四明知礼の学説を自由に援用しており、天台教学に詳しい人物であ

る。行禮は、従来の天台教団における諸天に関する各種の解釈を整理して、天台教学を含め、より広い範囲から諸天の説明を行った。

中国の仏教界が、インドから伝来した仏教を如何にして理解し消化したのかは、中国仏教史における大きな問題である。そこで『重編諸天伝』に記された諸天の伝記を手がかりとして、中国仏教の思想上の仏教諸神に対する認識の変化や後世への影響などについて考察することが重要かつ必要であるといえよう。

凡例

一、内容の構成は、原文・原文の現代語訳・注・記の順とした。

一、底本は、私蔵『重編諸天伝』二巻（中野是誰、寛文元年刊）を用いた。大日本統蔵經二二〇ノ二三ノ二（台湾新文豊版では第一五〇冊）にも『重編諸天伝』を収録したが、誤字脱字があるほか、どこの蔵本に拠るかについても明示されていないため、ここでは参照しない。

一、底本では、一部の旧字や異体字を用いるが、本訳注は常用漢字や正字に統一した。

一、原文読解の便宜のため、底本の読点を参考し、あらたに原文に標点を施した。

一、現代語訳は、基本的に底本の句読訓点をもとに訳出したものである。しかし、稀に見られる難解な箇所や不明の語句については、訳文前後の呼吸にそうように、その訳を省略することがあり、その場合には注にてその旨を記した。

一、各段の語句の注は、原則として、難解であると思われる人名・地名・仏教教用語、そして引用された經典の所出に限っておきたい。

一、各段の記は、主に『重編諸天伝』を開講した平成一八年の「仏教特講」の講義の中で示した問題意識や感想などによる。さらに智顛『金光明經文句』、知礼『金光明經文句記』、從義『金光明經文句新記』、宗暎『金光明經照解』の四書を参考し、天台教学に関わるもので、各段において注意すべき箇所を記し、天台教学における『重編諸天伝』の位置づけを示した。

訳注記

諸天伝序

迦文降世、宿願行者、隱實施權、示為天神。慈威折接、保衛國民、輔翼至教、以福資慧、助於說聽。然其列位、当就迹論。天台『百錄』、依『光明』鬼神品列之詳矣。自慈雲製懺、供天之設、時有移易。北禅首非之、而紛紜之論、遠今未已。鄞南師因欲刊正、而集『天伝』。尚或循旧、人亦病諸。

紹興間偶主烏戍塔院、鏡庵遷老出住宝閣、具元復在焉。考槃双槐、蓮社晦菴、一時諸方士以道義相忘、每以禪教詩文、雅会激揚。嘗論天位、考槃有言、「兩刹每供天会、既排列失序。二公之辯、正使無謬誤可也。」後既退間、分散南北。今十有五年餘。但於文稿間辯辯、時見于旧軸。回思昔会、真成落謝塵耳。既出空相、來謁鏡庵。乃見『重編天伝』已成、詳以閱之、豈止於旧。伝筆削潤色而已、且補入經論天文、辯証前失。仍立兩端、明排列之次、及各為讚詞、可謂始末大備矣。則如斯文、草創於鄞南、功成於鏡庵。使今古凝滯、泮然冰积、誠有補於流通。且喜不負考槃之囑、輒因勸請刊行。溥利見聞。敢書卷首、以告雲來。

乾道癸巳一陽前十日、伝天台教観 釈 奉規 序

諸天伝の序

釈尊がこの世に生まれ、夙世から釈尊と共に修行してきた者たちは、その本来の面目を隠し、仮りの姿でそれぞれの天神と化し、慈悲や威力を以て巧みに人を引導し、それぞれの国や人民を護衛し仏教を広げ、福德を以て、説法や聞法する者のために智慧を与えた。諸天の順位や配列は、当然それぞれの働きに従って論ずるべきものである。隋の智者大師の『国清百録』は、すでに『金光明経』の「鬼神品」に沿って詳しく説明していた。本朝の慈雲遵式懺主が「金光明懺法」

を定めてから後は、諸天を祭祀する方法も、時代とともに変化した。北禅淨梵法師は、最初に異論を称えたが、現在に至ってもなお様々な議論が存在する。鄞南神煥法師は、異論を収拾するために『諸天伝』を著したが、これもまた旧説に従う面を拭えず、非難を浴びた。紹興年間、私は、縁あつて烏戍塔院に住持した時、鏡庵行暉法師も烏戍の宝閣講院に住持しており、具元もまたここにいる。我々は考槃、双槐、蓮社、晦菴などの地方の名士と交誼が深く、常に禅学や仏理について詩文を以て議論していた。考槃居士はかつて、諸天の配列について、宝閣講院及び烏戍塔院で行われている儀式の諸天配列は正しくなく、北禅淨梵及び鄞南神煥の両師の意見を参考にすれば、間違いを防ぐことができる指摘した。その後、彼は官職から引退し、他の者もそれぞれ各地に分かれた。あれからすでに十五年が経過した。当時の詩文を見て、その様子が時々目の前に浮かび、その光景は落塵のように再び戻れないと感傷していた。行暉法師を訪ねたあと、彼は『重編諸天伝』を完成した。それを拝読したところ、神煥法師の『諸天伝』の内容を添削するだけでなく、仏教典籍や『天文志』などの内容をも引用され、前賢の誤解を訂正した。諸天は、昔と同様に両端に配列され、その順序を明らかにした上で、それぞれに讃歎の詩も加えられており、集大成であると言つても過言ではない。『諸天伝』は神煥法師によつて草案され

たが、完成したのは行暉法師である。これまで長年に亘り分らない疑問も、この著述によつて氷解され、学人の勉学に非常に有益な書となるに違いない。考槃居士の期待がようやく実現したことを私は嬉しく思い、学人の見聞を広めるために本書を是非刊行するようにお願い申し上げる。この序文を、恐縮しつつ書くのも、後の学人に本書の由来を記したいからである。

乾道九年十一月十三日、天台教觀を伝授する釈奉規が記す。

北禅北禅淨梵法師(?)一一二七、神照本如の法孫、神悟処謙の弟子。彼は曇無讖訳の『金光明經』に従い、あらたに『金光明懺法』を修めたという。伝は『仏祖統紀』卷一四、『釈門正統』卷六に記す。

鄞南鄞は地名、宋代では湖州から約三〇〇キロ離れた長興(現在浙江省長興県)の周辺を指す。「鄞」は秦朝に設立した郡名であり、『漢書』「高帝紀」下に説明がある。この「鄞南」は鄞南神煥法師(澄覚神煥とも言う)を指す。神煥は南屏系の慧覚齊玉(齊璧とも言う)法師(?)一一二九の法嗣、字は堯文、生卒は不明、湖州安吉の出身である。齊玉の門下の中で最も優秀な者と認められ、紹興年間(一一三一—一一六二)には思溪の覚悟寺に住持していた。その時、従来の天台教学では詳しく論じられていなかった百余りの問

題点を選んで説明し、『百章』という著作を完成した。その他、供天の儀式について、各地の寺院の諸天配列が統一されていないことに気づき、神煥は様々な經典及び天台の伝統的な教学説明を参照した上で、『諸天伝』を著し、諸天神の説明や配列時の注意点について論じた。同じく南屏系の竹菴可観(一〇九二—一一八二)は、神煥のこのような説を高く評価した。神煥はまた、『円覚疏』二巻及び『安樂記』一巻も著した。但し、前述の四書はいずれも欠本であり、神煥の思想を直接窺い知ることはできない。『金光明經』の諸天に対する配列を表した神煥の解釈は、現存する行暉の『重編諸天伝』、宗暁の『金光明經照解』、志磐の『仏祖統紀』から知ることが出来る。神煥は総庵妙心、常齋法拜、覚庵簡言の三人の弟子を持った。覚菴簡言(生卒不明)は、『法華玄義』に精通し、人々に敬服されていた。簡言の弟子である鑑堂思義(生卒不明)は宝慶及び紹定(一一三五—一一三三)の間に杭州の上天竺寺に住していた。神煥の教学について注意すべきは、知礼教学に反対する意見を有していた点である。『金光明懺法』の「供天儀式」について、神煥は明らかに知礼教学の提唱に反し、自分の意見を強調した。この点については、本論文第三篇第七章で詳しく論じる。神煥の他に、同じく齊玉の門下である法久清修、仮名如湛も知礼教学を激しく非難したことがある。齊玉本人も孤山智円の著述を研究し、その

未注書を著した。南屏系の齊玉系統の教学には、四明知礼教學を再点検しようとする学风が伺われる。

鏡庵耆老〓鏡庵行履。鏡庵はその号。

塔院〓『光緒湖州府志』卷二七によれば、『烏青文献』に「双塔対峙、為鎮眉目」(双塔対峙し、鎮の眉目と為す)と書かれ、宋代の烏鎮には白蓮塔及び寿聖塔の二塔があった。「塔院」は、烏墩鎮の崇寧年間(一一〇二―一一〇六)に作られた白蓮塔院(『光緒烏程県志』卷八、『中国地方志集成』浙江府県志輯二六、頁六四二上)か、熙寧年間(一一〇六―一一〇七)に作られた寿聖塔院(天台広福院とも言われる。『光緒湖州府志』卷二七、『中国地方志集成』浙江府県志輯二四、頁五一九下。)のいずれかであると思われる。

宝閣〓「宝閣」は曾て、晋水浄源(一一〇二―一一〇八)が五十年代後半から六十年代初に住した浙江烏鎮の隣り町、青鎮にある宝閣講院のことである。『光緒桐郷県志』卷五によれば、「宝閣」という寺院は青鎮の密印寺の西にあり、本来は密印寺の蔵経閣であった。慶暦年間(一一〇四―一一〇八)に密印寺僧の如實がこれを改造し、華嚴宝閣寺となった。

中国地方志集成』浙江府県志輯二三、頁二〇六下) 具元〓人名か。底本では固有名詞のように示したが、未詳。

考槃〓人名。不明。後の文脈から、彼は烏鎮に奉職し、奉

規及び行履の寺の行事をよく知る名士或いは官僚であると思われる。

双槐〓双槐居士鄭績、字は禹功。鄭績は、紹興年間に江南地方におり、参議や通判を勤めたこともある(『釋氏稽古略』卷第四)。大慧普覺禪師(一一〇九―一一六二)と親交があった(『大慧普覺禪師語』の「双槐居士鄭参議畫像讚」、また石井修道「駒澤大学佛教学部研究紀要」第四〇号「大慧普覺禪師年譜の研究」頁一四五を参照)。その他、烏鎮で活躍した『注肇論疏』の作者円義禪師遵式(一一〇四―一一〇三)の塔銘(『湖州府志』卷四八「金石略三」、『石刻史料新編』台湾新文豐)も書いた。

蓮社〓蓮社居士張掄。乾道年間(一一六五―一一七三)は均州防禦使充兩、浙西路副都總管秀州駐劄という浙江地方の高級官僚を勤めた。淳熙二年(一一七五)に『大慧年譜』に序を書いた人である。また、宋代天台浄土との交流も深く、宗暁が編纂した『樂邦文類』は、張掄の「結蓮社普勸文」及び「高宗皇帝御書蓮社記」を収録しており、蓮社結成の後援者であった一面も窺うことができる。宋の高宗皇帝が「蓮社」と指名した寺院は、『光緒烏程県志』卷八によれば、同じ烏墩鎮の中の普静寺である。張掄は、乾道年間に毎年結社して修治することがあったため、居士号が「蓮社」とされたことは自然である。

晦菴「不明。宋代に「晦菴」という号をもつ者は少なくない。大慧の法嗣である泉州教忠晦庵彌光禪師、同時代の信州龜峰晦庵慧光禪師、淳熙年間の侍御史李処全、さらに朱熹も全て「晦菴」という号を持っていた。この「晦菴」が上の四人のいずれであるかを断定することはできず、烏墩鎮に住する官僚または名士のことを指すと考えるのが妥当である。

空相「空相」は寺院名か。『光緒湖州府志』巻二七によれば、「空相」は、烏墩鎮から三十キロ離れた帰安県にあり、もとは「彌陀懺院」と呼ばれ、治平二年（一〇六五）に「空相教院」と改名したものである。古くから帰安県の天台教院の名刹の一つとして知られている。刊本『湖州府志』巻五・金石略六の「空相寺殘碑」には「（上闕）天台教猶盛。在吳興郡城者」。慈感空相（下闕）とある。この碑は、元の至元二十九年（一二六九）に伝天台宗教釈行春が建てたものである。「慈感」寺については『光緒烏程縣志』巻八（『中国地方志集成』浙江府県志輯二六、頁六三一上）または刊本『湖州府志』巻四九・金石略四に見える、宋の淳祐九年（一二四九）に伝天台宗教比丘覺澄が撰じた「慈感教院珠羅漢記」及び「慈感教院舍利寶塔」の二文を参照することもできる。經論天文「仏教の經論と史書に収録した「天文志」。『重編諸天伝』の「日宮天子」や「月宮天子」の伝記に、『漢書』の「天文志」などを引用したことがある。

一陽前十日「十一月十三日。一年を『易』の十二卦に配当すると、十月に陰が極まり、十一月の冬至に一陽がかかることから、「一陽」は冬至の言い替えである。

奉規「奉規は、天台教觀を伝える僧であった。しかし、『釈門正統』や『仏祖統紀』などの宋代天台僧侶を紹介する伝記にその名が見られないことから、それほど有名ではなかった。この序文によれば、奉規は紹興年間（一一五八年以前）には、烏墩鎮の塔院に住し、一一七三年頃には「空相」という寺院にいたという。

〔記〕

「供天」と玉仏禪寺の「齋天」

百年前に建立された上海の玉仏禪寺は、ミャンマーから二体の玉仏を迎えて奉っており、中国の江南地方では参拝者が最も多い寺院であると言われている。玉仏禪寺では、毎年欠かさず旧正月の九日、仏教の諸天を祀る「供仏齋天法会」という仏教行事を行った。

玉仏禪寺の「供仏齋天法会」を参詣したところ、これはあきらかに宋代の天台僧遵式が著した『金光明懺法補助儀』に基づくもので、また『金光明經』の經文を誦誦することもあるため、金光明懺法により発展したものと見るべきである。この種の「供仏齋天法会」は、玉仏禪寺のみならず、現代中

国の南方の各寺院でも数多く行われている。

現代まで続けられたこのような「齋天」儀礼の特徴について、拙著『宋代天台教学の研究』(山喜房仏書林、二〇〇三)では次のように記した。

現代行われている金光明懺作法は、そのほとんどが「齋天」と呼ばれ、弘贊の『供誥天科儀』或いは民国の『齋天科儀』の流れを受けるものである。その作法の手引きとして、『宝華律堂齋天科儀』(新文豐、一九九七)などは各寺院によっていまも利用されている。「齋天」が行われる期間は毎年の旧曆正月に限られる。(八一四頁)

「齋天」の作法は、宋代に確定した金光明懺法と異なり、懺悔から施食会へと次第に変化していたようすを伝えている。『金光明經』の教えに基づいている点は従来そのままであるが、数百年の時間を経る中で、金光明懺法が民衆が受け入れやすいように、道教や民間信仰の一部を導入していった点は注意する必要がある。(八一六頁)

いま、中国の各寺院における「齋天」儀礼の諸天配置のほとんどが、行禮の『重編諸天伝』に取り上げられた「熏修道場」の図によるものである。奉規の序文に見られる「供天」の儀式も、現在の「齋天」の原型であると言えよう。

宋代士大夫官僚の影響力

行禮の『重編諸天伝』は、単にインドから伝えられてきた、仏教の脇役である諸天の由来を紹介するだけでなく、もはや仏・菩薩の応身である諸天の本来の意義をも積極的に取り入れて説こうとするものである。『重編諸天伝』の中で、行禮が「供天」儀式における諸天の配置を抜本的に統合しようとしたきっかけは、烏鎮の官僚であると思われる考槃居士の一言によるものであると記し、当時の士大夫官僚がもつ大きな影響力を示した。

『重編諸天伝』の序文に見える雙槐居士鄭績、そして、蓮社居士張掄などの宋代士大夫官僚は、各地の名僧に帰依し世間に居士仏教を鼓吹する一方、仏教教団の発展に対しても非常に協力的であつて、また、教団内部の論議にも積極的に意見を言うようになった。張掄は、かつて、念仏結社の普勸文を作り、鄭績も僧侶の塔銘まで起草し、仏教界と深く交流した。この時代の仏教を信仰する士大夫官僚階層は、一般民衆のように、仏教に追随するばかりではなく、また、魏晉南北朝の士大夫のように、仏教の理論を検証し、受容しようともしない。むしろ、彼らは自らを仏教の護法者であると認めていたことが伺われる。

宋代天台を中興した四明知礼は、当時の宰相、魯国公曾公亮と親交があつた。曾公亮は、知礼の延慶寺に土地や建物を

寄進し、明州一の名刹に押し上げた。その代わりに、延慶寺は寺院の中で大檀越である曾公亮の祠堂まで建て、永く記念の意を表した。公亮の曾孫である曾愷（職は右朝散郎、提舉兩浙路市舶。今の税関長に相当する）は百年後、その祠堂の記に、

王・公たる大人物は、時を得て道を行い、その恩沢は天下に及び、その名声は後世に顕れる。これはすべて眞の仏法を学び、仏果を得て、願力によつて、世間に身を降ろし、宰官の身となり、自在に働くものである。

（王公大人、得時行道。利沢及於天下、勳名表乎後世。是皆超詣真乘、証登果位。以願力故、來応世間。宰官之身、隨赴而見。）『教行録』卷六「曾魯國宣靖公祠堂記」

と書き、祖先への自負心を抱きながら、宰官となる者は実に仏菩薩の応身であり、仏法を守るためにこの娑婆世間に降誕したという。

これに対し、曾愷の友人と見られる薛居実（職は右承議郎、興化軍知事）も、

如来はあるとき、宰官の姿と化してその教えを広める。

（如来或現宰官身說法）『教行録』卷六「曾相公府延慶寺置莊田帖」

と附和した。

左様な考え方は宋朝における『観音経』や『楞嚴経』の流行によるものである。『法華経』の「普門品」（即ち『観音経』）では、観音菩薩は衆生を救い尽くすために、仏身・辟支仏身・声聞身・梵天身・帝釈身・自在天身・大自在天身・天大将軍身・毘沙門身・小王身・長者身・居士身・宰官身・婆羅門身・比丘身・比丘尼身・優婆塞身・優婆夷身・長者婦女身・居士婦女身・宰官婦女身・婆羅門婦女身・童男身・童女身・天身・竜身・夜叉身・乾達婆身・阿修羅身・迦楼羅身・緊那羅身・摩睺迦身・執金剛身など三十三の応現身を以て衆生に接した。『楞嚴経』では、観音菩薩が宰官身を含む三十二の応身を成就し、そのいずれも如来と同じ殊勝功德を有するといふ。

宰官の身は仏菩薩の応身の一つである經典の説は、当時の士大夫官僚階層に浸透し、彼らが自発的に影響力を発揮し、仏教の護法になる重要な原因である。

重編諸天伝并叙

烏成 釈 行 羅 述

昔鄩煥師謂、凡列天位、失尊卑之序、無昭穆之儀、歎其習俗既久、未有刊正其事者。因檢大藏、作諸天列伝。然草創之功、良可尚也。但其列位之次、及各為伝詞、多從己意。至于

経論顯文、而不録入。今事筆削、以全始終。於是去繁凡、輔闕略、以輔先志。孤山嘗曰、「後之病今、亦猶今之病昔。」儻有未安、更俟來哲。庶使天神呵護之迹、大權垂庇之本。無失其正、而歸于是而已。

時乾道癸巳仲秋之晦、於福田西華嚴蘭若誌。

撰者の序

烏成の釈行蘊が述す。

以前、鄞南の神煥法師は、各地の諸天の配列が、尊卑、長幼の序を守つてないと語り、このような弊習が続けられていたのに、だれもそれを指摘しないことを悲嘆した。そして、彼は經典を精査し、諸天の列伝を編集した。その業績はまことに尊敬すべきものであるが、彼が配列した諸天の順次及びそれぞれの伝記の内容は、自創の説を多く主張するもので、経論に明らかに出てくる典拠すらも引用していない。そこで、私は彼のを添削整理し、煩瑣な引用や平凡な説を削除し、いままです省略された内容や簡単にすぎる説明を補充した。孤山の智円法師は曾て「後世の学人が我々の問題点を指摘するのは、我々が過去の問題点を指摘するのと同じである」と述べた。十分でないところがあつても、すべて後の学人の判断にゆずりたい。諸天が護持した応迹、大権菩薩が現した根本を、間違えることなく表したいと願つのみである。

乾道九年八月三十日、福田寺の華嚴經堂にて記す。

鄞南煥師前出。鄞南神煥法師。

昭穆之儀「長幼の序。『周礼』に「辨廟桃之昭穆」の一文が見られる。鄭玄は「父曰昭、子曰穆」と釈した。

孤山「孤山智円(九七六—一〇三二)。俗姓は徐、字は無外。自ら潜夫また中庸子と号した。『文殊説般若經』、『般若心經』、『不思議法門經』、『阿弥陀經』、『遺教經』、『瑞応經』、『普賢行法經』、『無量義經』、『四十二章經』、『首楞嚴經』に注釈を著したことから、世間では「十本疏主」と呼ばれていた。宋初天台論争に関わる「山外派」の重要人物であり、四明知礼の主な論敵の一人である。ここでの引用は、智円『開居編』卷五、「孟蘭盆經疏撰華鈔序」、「所冀後之病今、亦猶今之視昔云」の一文による。

福田西華嚴蘭若「光緒烏程県志」卷八によれば、烏墩鎮の福田寺の側にある華嚴經堂のことと思われる。(『中国地方志集成』浙江府県志輯二六、頁六四〇下、頁六四六上)

〔記〕

神煥の『諸天伝』の説

神煥の『諸天伝』は早くも散逸したため、その内容を知ることではできない。しかし、『釈門正統』、『仏祖統紀』、『金光

明經照解、『重編諸天伝』の中には、神煥の説が断片的に引用されているので、神煥の『諸天伝』の重要な説を確認することができる。その中で最も詳しい資料は『釈門正統』巻七の「神煥伝」の引用内容である。

『諸天伝』の序は次のように述べる。『国清百録』は、功德天像は仏像の左側に安置し、仮に道場が広げれば、仏像の右側に大辯天像及び四天王像を安置すると説いた。このように世間の人々が七像、十六像、十八像、二十一像と数を増減したのは、皆な『金光明経』の「鬼神品」に従ったからである。私（神煥）は尊卑長幼の序列を正しく整えたいと考えるが、これは多くの反発を招く大変難しい作業であることが予想される。しかし、たとえば、鬼子母は羅刹鬼であり、大梵天と同列にすることはあり得ない。鬼子母には功德天という娘、散脂大将という息子がいるのである。それなのに今は、功德天が上座に居り、その次に大梵天、帝釋天と並び、下座に散脂大将と鬼子母が配列されている。これは長幼尊卑の序を破っているのではないであろうか。私（神煥）は誰もこのような弊習を指摘しないことを悲嘆していた。そこで經典を檢索引用し、『諸天伝』を作り、諸天の順序を再配列し、それぞれに説明を加えたのである。諸天の配列には、「主客」、「男女」、「本迹」、「顯晦」の四つの分け方がある。

大梵天は三界の、帝釋天は初利天の、四天王は天龍八部の首長である。功德天や大辯天はただ客として身を寄せるだけである。功德天は北方天王が管轄するところに住み、大辯天は山や川に住み、本来主領するところがないのである。これは、「主客」の意味である。功德天、大辯天、樹神などは女身であり、大梵天や四天王などは男身である。これは「男女」の意味である。金剛密迹力士とその五百の眷属は、本来は皆な大菩薩であり、今は天神の姿で仮に現れているのである。これは「本迹」の意味である。大辯天は釈尊と共に仏法を宣揚し、客であっても、女であっても、その働きは明らかなものである。ただ影響衆のように、なにも言わず、仮に王を統率する能力があっても、男身で現れても、その働きは見えないのである。これは「顯晦」の意味である。これら四つの意味を知って、はじめて、諸天云々を言うことができるのだ。その他、日月天子を加えた理由は、その輝きが世間を照らしているからである。摩利支天を加えた理由は、戦争や兵難を救うことができるからである。娑竭羅竜王を加えた理由は、風雨の巡りをよくすることができるからである。閻摩羅王を加えた理由は、冥界の主であるからである。祭る諸天の数は全部で二十一である。もし訶利帝南と鬼子母を同一視すれば、その数は二十となる。

(其序曰、「據『百録』安功德天座在佛左、道場若實、更安大辯及四天王在右。則知世人或七、或十六、十八、二十一、位、皆準「鬼神品」、任其增減耳。今欲定尊卑、列昭穆、良亦甚難。只如鬼子母乃羅刹也、豈得與大梵同列。有女名功德天、男名散脂大將。今以功德天居上、梵釈次之。後列散脂鬼子母、非失序耶。予嗟習俗之迷、未有表章者。因檢尋大藏作『諸天伝』。排出位次、隨位釋之。蓋天有主客、有男女、有本迹、有顯晦。大梵為三界主、帝釈為三十三天主、四王為八部主。若功德大辯、但寄寄耳。功德寄北天、大辯寄山澤。初無主領、茲所謂有主客也。功德大辯樹神等、並女質。梵王四王等、並男身。茲所謂有男女也。金剛密迹、五百徒黨、皆大菩薩、本也。現居神像、迹也。茲所謂有本迹也。大辯対仏宣揚正法、雖位處客天、身拘女質、而言行則顯。或但作影響衆、不事敷揚。縱權有統王、現丈夫形、而言行則晦。茲所謂有顯晦也。知此四端、可與言天矣。如日月光明照世故、加摩利支救兵才、戈か難故、加娑竭羅保風雨故、加閻摩羅王冥界故。共二十一位。若合訶利帝南同鬼子母即二十位耳)〔統藏經百三〇冊四三七左上〕

『釈門正統』が引用する神煥の『諸天伝』の「序文」によれば、神煥の説の要点は次の通りである。

一、『國清百録』が説き、知礼や遵式が行つた「金光明懺

法」の諸天の配列は、諸天本来の地位を考慮せずになられたものであり、問題であるとした。

二、儒教的な発想を借りて、「主客」、「男女」などを意識し、諸天の配列においても新たに「主客」、「男女」、「本迹」、「顯晦」の四つの基準を設けた。

三、祭る諸天の数について、二十が妥当であるとした。即ち、訶利帝南と鬼子母を同一視し、大梵天、帝釈天、四天王、金剛密迹、摩醯首羅、散脂大將、大弁天、功德天、摩利支天、韋駄天神、堅牢地神、菩提樹神、鬼子母、日天、月天、竜王、閻羅の二十の諸天を対象とした。

(つづく)